
紅蓮の翼

神田瑞樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅蓮の翼

【Nコード】

N5548S

【作者名】

神田瑞樹

【あらすじ】

もしもネギに兄がいたら？

そしてそれがナギに似ていたらと言う設定で送る、IFの物語。

第一話 『全てはここから始まった』

少年は逃げていた。

息を乱し、幾重もの障害を乗り越えて逃げ回っていた。

捕まればいかなる苦痛を味あわされるかわからない。

それを知っているからこそ、彼は背後からの投降を呼び掛ける無数の声を無視した。

(誰が捕まってやるかよ！)

あの角を曲がれば外まではあと僅か。

そう。絶対に逃げきってみせる。

この、

「「「止まれっ！ この悪ガキっ！」「」」

教師達から。

「またかの……………」

室内に呆れた声が響く。

アンティークの事務机に腰掛けた白髪の老人

メルディナ

魔法学校校長 は大きく息を吐き出し、目の前で不貞腐れる少年に目をやった。

「で、今度は何をやったのじゃ？」

「別に大したことはしてねえよ」

最初に目につくのは見事なまでの赤。

豊かな赤毛に、幼いながらも将来性を感じさせる整った容姿。

レギ・スプリングフィールド。

学院内で最も有名な生徒にして、現在留年まっしぐらの落ち零れである。

レギがそう嘯くと、隣から怒声が飛んだ。

「教師をボコボコにしといて、何を言っている!？」

「っせくな。『全力で来い』って言ったから、その通りにしただけじゃねえか」

顔を真っ赤にしてレギを怒鳴りつけている中年の男は、さっき彼を追いかけていた教諭の一人。結局あの後、数の暴力に勝てなかったレギは何度目になるかわからない学園長室への連行を受けることとなった。

ふうふうと息を荒げ、今にも噛みつきそうな教師を宥めながら、学園長はレギを促す。

「ふむ。詳細を知りたいのお。レギよ、詳しく説明しなさい」

「だから大したことじゃねえって」

レギの話をつなぐとこうだ。

五年生から新たに始まった『魔法戦闘』の授業も二学期に入り、教科書から離れた実際に身体を動かしての授業が始まることとなった。

そして本日はその記念すべき第一回目。

中庭に集められた生徒達に向かい担当教師（噂によると、昔ナギ・スプリングフィールドにボコボコにされた経験あり）は初めに手本を見せると言い、その相手としてレギを指名した。

「成績が振るわないとはいえ、かの英雄の息子だ。まさか逃げるなんてことはしないだろうね？」

嫌味な口調でそう言われれば、レギも黙っていない。
ピキリと米神に青筋を浮かべながら教師と対峙し、

「本気でやっていいんだよな？」

「勿論。全力で来たまえ」

レギが詠唱をしてからで十分だと考えているのか、魔力も障壁も纏っていない。

結果として、それが命取りとなった。

レギは魔力を纏うと瞬動を駆使して間合いに入り込み、相手が魔法障壁を張るよりも早く鳩尾目がけて拳を振り抜いた。

「ぐおっ!？」

驚愕と共に教師は目を見開き、くの字に身体を折り曲げる。

レギは凄絶な笑みを浮かべ、これまでの鬱憤を晴らすかのようにひたすら殴り続けた。

そうして一方的な惨劇が始まってから数分。

生徒からの通報を受けて他の教師達が来た時に見たのは、ボロボロとなつて気を失つた同僚と、やたらと満足げなレギの顔。

教師達からの詰問に対し、レギは自分の無罪を主張したが当然の事ながら受けいれられる訳はなく、結果冒頭に至るといふわけである。

「なつ？ 別に大したことねえだろ？」

「どこがだつ！？ 幾ら何でもやりすぎだ！ ったく、成績は学年最下位、問題行動多数。このままでは父親の様な『立派な魔法使い』になるなど、夢のまた夢だぞ！」

校長に報告するいい機会だと思つたのだろう。

ここぞとばかりに一息で捲し立てる教師の言葉の節々には、怒りだけでなく強い失望も交じっていた。

「けっ！ いつも親父親父つてうるせえんだよ！ 俺は俺だ。英雄だろうが何だろうが、あんな奴のようになるなんざあ、こつちから願ひ下げだつっの」

「なに！？」

「まあまあ、二人とも落ち着きなさい。確かマルコ先生はまだ授業

があつたじやる？ 後のことはわしに任せて早くいきなさい」

「ですが!？」

「……マルコ先生」

「くっ、わかりました」

歯ぎしりでもしそうな勢いで顔を大きく顰めながら、マルコは泣々と退室する。

後に残ったのはレギと学院長の二人。

学院長はふーと大きく息を吐き出し、

「これでやつと静かに会話ができるの。しかしレギよ、一体いつの間に『戦いの歌』と『瞬動』など覚えたのじゃ？ 確か授業では教えていないはずじゃが」

「ん？ ああ。冬休みに村に帰った時に広場でスタンの爺さんと酒場の親父が喧嘩やっててな。そこで使ってたのを見てたら勝手に覚えてた」

「見て覚えた……。のお。その能力を少しでも勉強に活かせれば、こんな成績を取らずにすむというのに」

学園長は右手に持った羊皮紙をひらひらと振る。

細工が出来ぬよう、魔法のインクで書かれているのは昨年のレギの成績。

見るも無残な成績に、罰が悪そうにレギはそっぽを向いた。

「……勉強は嫌いなんだよ。んで、結局俺はどうなるんだ？ つい

に退学か？」

「そうじゃな……………」

元々の原因は教師側にあるとは言え、レギがやりすぎたのも間違いない。

これまで積み重ねてきた問題行動と合わせれば本来は退学も止むなしだが、とある事情からそうすることも出来ない。

妥当な落とし所としては反省文とトイレ掃除あたりだが、それは先週課したばかり。

どうしたものと何気なく視線を壁にやった時、飛びこんできたのは今月のカレンダー！。

「ふむ。レギよ、確かお前とネカネが村に戻るのは明後日だったの？」

「急に何だよ？」

「なに、少しばかり早いがお前に里帰りをさせてやるうと思つての。では、処分を言い渡す。レギ・スプリングフィールド、お前は明日から連休明けまでの計三日間の謹慎処分とする。場所は学院から離れたお前の村じゃ。今日はこのまま寮へと戻り、明日一番のバスで村に向かうがよい」

謹慎と言っているが、その実は一日早い里帰りだ。

レギは肩を竦めて了解の返答を返し、そのまま寮へと戻ろうと学院長に背を向ける。

「のお、レギ。未だにナギのことは嫌いか？」

ピタリと、背後から投げかけられた疑問に一瞬足が止まるも、すぐにまた歩みを再開する。重厚感あるドアを開き、

「ああ。大嫌いだ」

言葉と共に、ドアは閉じられた。

第一話 『全てはここから始まった』 (後書き)

arcadiaより移って来ました。

今後、よろしくお願いします。

第二話 『英雄の息子』

まだ薄らと空が白い早朝。

満足に舗装されていない山道をバスは走っていた。

元々利用客が少なく、更には早朝と言うこともあってかバスの乗客はレギただ一人。

ガタンゴトンと小刻みな振動を感じながら、レギはぼんやりと窓の外を眺めた。

(村に帰るのは一カ月振りぐらいか……………)

魔法使いが数多く暮らす故郷の村は、その秘匿のために人里離れた山奥に居を構えている。外界と結ぶ唯一の交通手段であるバスは片道三時間、本数も日に数本と限られており、纏まった休みの時にしか帰郷できないというのが実情である。

(ネギのやつ、元気にしてやがるかな)

まだ三歳にして一人で生活している弟を思い出す。

一応何かと村の住人達が世話を焼いているが、それでも寂しい思いをしていることは間違いない。帰ったら遊んでやろうと思いつくだけに頬を綻ばせるが、すぐに溜息を吐く。

(また言われんだろうな)

学院で問題を起こして謹慎処分を喰らった。

そう言った時の村の住人達の反応は容易に予想がつく。

『やっぱり、ナギの息子だな』

ナギ・スプリングフィールド。

それはかつて魔法界で起こった世界大戦を終結させた英雄の名。教科書に出てくるほど有名な人物だが、レギにとってはそんな大英雄も子供を捨てた最悪の親父でしかない。

レギがこの世に生を受けたのは今から八年前。

まだナギ・スプリングフィールドが存命であり、世界を旅していた時のことだ。

子供を危険に晒さないためなのか、それとも世界を旅するには邪魔だったのかはわからないが、レギは物心つく前には村に預けられ、その後はまだ幼いネカネと村の住民によって育てられた。

故にレギにとっての親とは彼らの事を指し、二、三回しか顔を見たことのない実父や、顔は愚か名前すらも知らない実母のことは多少の興味こそあれ、それ以上の存在ではなかった。

それが変わったのは三年前、ナギ・スプリングフィールドの死亡が発表された時だ。

当時五歳であったレギには殆ど顔を見たことのない父親が死んだと聞いても大した感情は湧かなかった。変わったのは周囲の方。成長するにつれて似ていく容姿と悪戯好きな性格も後押ししたのだろう。

ナギが死んだ後、人々は以前にも増してナギの面影をレギに見出すことが多くなった。

勿論、レギも最初はそんな風に見られているとはわからなかった。悪戯をした時に「やはりナギの息子か」と懐かしそうに言われた時には違和感を感じたが、それが何を意味するのかまでは理解でき

なかった。

だが、そんなことを繰り返していく内に、レギは自分がどう思われているのかを自然と察するようになった。

『ナギ・スプリングフィールドの代替物』

自分を自分として見てくれない。

怒りや不満、恐怖と言った様々な感情が入り交りながら、皆が自分を見てくれる方法をがむしゃらに模索し始めたのは五歳の冬のこと。

ある時は村の中心部に巨大な落とし穴を仕掛け、またある時は魔法学院の図書室から禁書を盗み出し、そしてまたある時はクマと戦って重傷を負った。

いずれも村や学院を巻き込む大事件であったが、その時人々の言うことは決まっていた。

『やっぱり、ナギの息子だな』

『英雄の息子がこんなことでどうする』

前者は幼少期のナギを知る者の、後者は『英雄』としてのナギしか知らない者の言葉である。どちらにせよ、やはり一言目に来るのは『ナギ・スプリングフィールド』の文字。

それを何とか打破しようと試行錯誤を繰り返したが、全て無駄に終わった。

結局、人々にとってレギ・スプリングフィールドとは単なる『ナギ・スプリングフィールドの息子』でしかなかったということだ。

(ほんと迷惑な話だぜ)

今やレギをレギ個人として見るのは、身内であるネカネやネギを筆頭とした極少数。

それ以外は、例え口に出さなくともレギの中にナギを見ているのがわかる。

特に今向かっている故郷の住民達はその傾向が強い。

(嫌いってわけじゃねえんだが……………)

皆いやつだと言うのはわかるし、育てて貰った恩もある。

だから学院の教師に比べればずっと好感が持てるのだが、やはりどこか思うモノがある。

レギのすつきりしない気持ちに関係なく、バスは着実に故郷へと向かっていた。

「あゝ、やっと着いた」

バスに揺られること三時間、更にそこから歩くこと二十分。
ようやく故郷の村へと辿り着いたレギは住民達から予想通りの言
葉を受けて辟易としながらも、ネギの住むログハウスに辿り着いた。
片手に持っていた荷物を置き、呼び鈴を鳴らす。
中からバタバタと駆けてくる音が耳に届き、一拍の間の後に扉が
開かれた。

「どなたです……………か」

「よっ。元気にしてたか、ネギ」

特に変わった様子の無い弟に少し安堵し、片手を上げる。

それを見た若い少年ネギ・スプリングフィールドは、一瞬驚愕を
露にし、そして満面の笑みと共にレギの胸元へと飛びこんだ。

「兄さんっ!!」

「おお、元気そうでよかったぜ」

くしゃくしゃとネギの赤毛をかき回してやる。

ネギはくすぐったそうに頬を緩め、兄の顔を見上げた。

「でもどうしたの兄さん？ 帰ってくるのは明日のはずじゃ」

「まあ色々あってな。とりあえず、家に上げてくれ」

「うん!」

今にもスキップしそうな勢いで家へと入っていくネギに苦笑しな

がら、レギもその後を追う。玄関をくぐると同時に広がるリビングの端に荷物を下ろすと、二人はテーブル越しに向かい合う形で席に着いた。

ネギはレギがない間に起こったことを楽しそうに話し、レギは時折合いの手を入れながらそれを聞いてやる。

他愛ないやり取りの後、話題はレギが来る前にネギがやっていたことに移っていた。

「へー。魔法の練習か」

「うん。でも、中々成功しなくて……」

ネギは子供用の練習杖を取り出して呪文を唱えるが、何も起こらない。

しょんぼりと肩を落とすネギに苦笑しながら、レギは「貸してみな」とネギから愛らしい杖を受け取る。

「よく見ときな。プラクテ・ビギ・ナル “火よ灯れ”」

ポウツと音を立て、杖の先端から大きな火柱が上がる。

ネギはわあっと驚きと興奮を持ってそれを見つめるが、レギは内心冷や汗ものだった。

(やべっ、加減間違えた)

本来この魔法はライター程度の火を灯す程度の魔法だ。だが、レギのそれは天井近くにまで伸びる巨大なもの。これこそがレギの成績が晩年最下位である理由。

魔力コントロールの下手さ。

膨大な魔力を持つが故に、その細かなコントロールが出来ない。

だから適切な魔力のコントロールを必要とする実技の試験は常に赤点（ちなみに、父親のナギ・スプリングフィールドもそうだったらしい）。

レギは魔法を止めると、内心を悟られないように余裕たっぷりな表情でネギに向き直る。

「ま、まあこんなもんだ」

「すごい！ さすがは兄さん！」

純真な瞳を向けられれば些か心が痛まないわけでもないが、そんなものよりも兄としての威厳の方が大事だ。

結局その日は一日中ネギの魔法を見てやることとなり、夕方には終にネギも魔法を使うことに成功した。

ネギが初めて魔法を使ったことにはしゃいでいる隣で、僅か三歳の弟がキツチリと魔力をコントロールしたのを見て密かに落ち込んだ兄がいたのは秘密である。

そしてその日の夜。

同じベッドに入った二人は、就寝までの時間を取りとめのない話で過ごしていた。

「そっぴやネギ。姉さんから聞いたが、お前親父に会うために湖に飛び込んだらしいな？」

「う、うん」

「そんなに親父に会いたいか？」

ネギが湖に飛び込んだと聞いたのは、教卓にカエルとヘビを仕込んだ罰として教会での奉仕活動から戻った時。ネギが父親に会うためにやったと聞かされた時は、複雑な気持ちになったのを今でも覚えていいる。

ネギはレギの質問に一瞬キョトンとし、すぐに満面の笑みと共に頷いた。

「うん！」

「そうか……………」

自分の意見をネギに押しつけることは出来ない。
なぜなら、それはネギが自分で判断することだからだ。
レギはここまでだと、話を止めて蠟燭の火を消す。

「んじゃ、明日もあるしもう寝るぞ」

「うん。お休み、兄さん」

こうして一日が終える。

しかしこの時、二人はまだ知らなかった。

運命の日は、すぐそこまで近づいていたことを。

第二話 『英雄の息子』（後書き）

二話投稿。原作につくまで一体何話かかるのやら。

第三話 『襲撃 起点』

故郷へと戻った翌日の午後。

少し遅めの昼食を終えたスプリングフィールド兄弟は、ネカネが村に着く夕方までの時間を少々村から離れた湖で過ごすことにした。水辺に並んで座る二人の手には簡易な釣り竿が握られ、その針は湖の中へと放り込まれている。何一つ当たりがないまま30分が過ぎた頃、大きな欠伸を噛み殺したレギは弟へと声をかけた。

「なあ、ネギ」

「なに？」

「これ、楽しいか？」

「うん。楽しいよ」

「……………そうか」

本当に魚が住んでいるのかと疑問に思うほど、水面には波紋一つ浮かび上がらない。

もともとこんな風にじっとしているのは苦痛に感じるレギだ。すぐに変化のない今の状況に飽きが来た。

(いつそ湖に雷でも叩きこんでやろうか?)

一瞬本気でそう考えるが、流石に弟が楽しんでいるのを邪魔するのは忍びない。

仕方なく水面をぼんやりと眺めてみる。

澄んだ水面に映っているのは赤毛の己の姿。

そこに写真で見たあいつの面影を否応なく見出し、レギは顔を顰

めた。

あの男のせいで、自分はいいつの代替物として見られるようになってた。

あの男のせいで、今自分は悩んでいる。

忌々しい奴と、心の中で吐き捨てる。

だが復讐しようにも、憎きあいつはもうこの世にはいない。

そのことが、苛立ちをより一層大きなものにする。

(……………英雄ってんなら、簡単にくたばってんじゃねえよ)

殴る相手がいねえじゃねえか。

複雑な表情で思考の海に耽るレギだったが、すぐに陰鬱な気分を払うかのように首を横に振った。久々となるネギとの交流だ。辛気臭いことを考えるのは止めだと竿に意識を向けかけた、その時だった。

「つつ!？」

冷たい何かか背筋を駆け抜ける。

ぞわりとした嫌な感触。

ネギの様子を窺うが、特に何かを感じた様子はない。

「どつしたの兄さん?」

「……………何でもねえよ」

きつと勘違いだろう。
柄にもない事を考えていたから気が立っていたただけだ。
レギは再び竿へと意識を戻した。

「お姉ちゃん、もう戻って来てるかな？」

「さあな。案外俺らの方が早いかもしれねえぜ？」

日が沈みかけた頃、魚釣りを終えた二人は村へと続く小高い丘を登っていた。

ネギは徐々に会う姉を思い目を輝かせ、レギはそんな弟を見て苦笑を浮かべる。

他愛無い兄弟のやりとり。

二人はこの先に待っている自分達の村を思い浮かべながら丘を登り切り、

「えっ？」

かたんと、二人は手に持っていた釣り竿とバケツを落とす。
理解できない。

何が起きているのか、今見ているものが何なのかを理解することを脳が拒絶する。

ネギは呆然と立ち尽くし、レギもまた目を見開いた。

村が、赤く染まっている。

家が、店が、木々が、教会が

村が、真紅の炎で包まれて

いる。

「何が……………起こってやがる」

上手く口が回らない。

感じた不安はまさかこの事だったのか。

後悔するがもう遅い。

我に帰った時、ネギは既に丘を下って村へと走っていた。

「あのバカ……………！」

まともに障壁も使えないネギが燃え盛る町の中に入るなど自殺行為だ。

急いで追いかけてようと足を踏み出しかけた直後、

「つつ！？」

池で感じたものよりも更に冷たいものが背筋に走り、レギは咄嗟に周囲を見回した。

視界が届く範囲には、特に変わった物はない。

単なる気のせいだとは到底思えなかったが、今はそれを探し出す時間もない。

「くそっ！」

何もかもがおかしい。

大きな舌打ちと共に、レギもまた炎の中へと入って行った。

ネギを追いかけて村に入ったレギの視界に飛び込んできたのは、複数の人間大の石像だった。何でこんな物がと言う疑問は、炎に煽られた石像の顔を見た瞬間に霧散する。

そこにあっただのは精巧な人の顔。

レギのよく知る、村人達の顔。

「くっ!？」

村人たちを苦手に思っていた部分は確かにある。

けれど、決して嫌いじゃなかった。

ましてこんな物言わぬ姿にされて冷静でいられる程、レギは冷たな人間でもなかった。

頭に血が上り、爪が肉を食い破らんばかりに手に力が入る。

本当ならこれを創り出した犯人を捜し出して、感情の赴くままぶちのめしたい。

だけど今は、

「……………ネギを探さねえと」

幸い、ネギはすぐに見つかった。

村の中心となる広場で石像と化した村人達の前で立ち竦み、涙を落していた。

「ネギ!？」

「に、兄……………さん……………みんなが…石……………に……………」

「ああ！ だからここから離れるぞ！」

「……………ぼくが、ぼくが思ったから……………ピンチになったらお父さんが来てくれるって……………そう思ったから……………みんな、石に……………」

初めは、何を言っているのかわからなかった。

だが昨夜のことを思い出し、その意味を理解した瞬間、レギは叫んでいた。

「つつ！ んなわけねえだろー！」

「で、でも……………僕が……………」

「ネギのせいじゃねえし、お前が責任を感じる必要なんか全くねえんだ！ わかったな！？」

「……………うん」

「よし、とつとと行くぞ！」

ネギの手を握り、村の出口に向かって走り出す。

だが二人がそこに辿り着く事はなかった。

数歩と行かぬ内に、地中から這い上がった者達が二人の行く手を遮ったからだ。

「あつ、ああ……………！？」

「悪魔っ！？」

次々と地中から湧いてくる異形の軍団。

咄嗟に怯えるネギを背後に隠し、レギはこの惨劇の元凶と思われる犯人達を怒りに満ちた目で睨みつけた。

「エス・ケル・ト・トラス・エルトピス 来たれ雷精、風の精！！」

ネギの魔法を見てやるために借り受けていた練習杖を懐から抜き、ラテン語の詠唱を紡いでいく。魔力の籠った言霊が世界へと働きかけ、その理を改変する。

科学とは異なつた法則の下で成立する、古より続く神秘。

人はそれを『魔法』と呼んだ。

「雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！！」

術者の怒りに同調して溢れだした魔力が雷と嵐となつて右腕を包み込み、その解放の時を待つ。

放たれるはレギの持つ最強呪文。

禁書棚から盗み出した本の中で見つけた、雷と嵐の混合呪文。

「そこを、のきやがれっ！！」

“雷の暴風っ！！”

稲妻を纏つた旋風が漆黒の軍団に襲いかかり、その陣中を食い破つて行く。

黒の中に空く僅かな隙間。

されどそれは、地中からの漆黒の増援によって埋め尽くされた。

『がああああああ』

「ちっ！」

「に、兄さん!？」

「大丈夫だっ！」

とは言ったものの、状況は最悪に近い。

レギの最強魔法は数を増やし続ける魔の軍勢に対して焼け石に水程度の効果しかなく、後数分もすれば自分達は漆黒の海に吞まれることになるだろう。

(ネギを抱えてここから逃げれるか?)

自分一人でさえ厳しいのに、ネギを抱えてだと正直不可能だと言ってもいい。

空を飛んで逃げようにも、筈変わりとなる杖は先日の一件で取り上げられていて手元がない。あるのは、いつ壊れるかもしれない子供用の練習杖。

(けど、やらないとな……………)

ここにはネカネ姉さんも、スタンの爺さんもいないのだ。

なら、兄である自分がネギを守るしかない。

「ネギ、俺から離れるんじゃないぞ」

「う、うん……………」

時間をかければそれだけ悪魔の数は増えて状況は悪くなっていく。

また体力的にも精神的にもそう長くは持たない。
故に強行突破。

左手でネギを抱き抱え、右手には杖を握りしめる。

「行くぞ！」

魔力を全て『戦いの歌』と障壁に注ぎ込み、大地を蹴った。
それに向かい打つは、山羊や牛の顔を持った低級悪魔達。

“魔法の射手・連弾・光の七矢”

無詠唱から発せられた七つの光の弾丸が突出していた悪魔の勢いをそぐ。

まだまだ錬度が足りないために還すには威力が足りないが、僅かな間その勢いを止めるには十分だった。

すかさず瞬動を用いて軍団を振り切り、村の外を目指す。

『グアアアアア』

「っ、うぜえ！」

襲い来る鋭い爪や拳をネギに当たらない様かわし、時には障壁で受け流してひたすら外を目指す。

どこかぎこちない、無駄の多い動きでありながらも決定的な一打を受けずに済んでいたのは、レギの非凡な才能の証明に他ならなかった。

だが幾ら才能があろうとも、所詮は実戦経験のない子供。

また今はネギという大きなハンデもある。

当然、限界はすぐに訪れた。

「兄さん右っ!?!」

「なっ!」

悲鳴染みたネギの声に、咄嗟にレギは右腕をガードに回す。直後、圧倒的な衝撃がレギを襲った。

「がっ!?!」

「わっ!?!」

障壁越しだと言うのに、凄まじい威力。受け止めきれず、ネギもろともレギは吹き飛ばされた。

「っち!」

空中で何とか体勢を整え、二本の足で着地の勢いを和らげる。

「大丈夫か、ネギ!?!」

「う、うん……」

多少目を回したようだが、特に怪我はみあたらない。

そのことにレギは少し安堵するが、右腕を見てその表情は険しいものになる。

(……やべえな)

攻撃を受けた右腕は魔力の強化もあって多少痛む程度だが、杖の方はそうもいかなかったらしい。

星飾りの部分に大きな罅が入っている。
元々木の棒程度の耐久性しかない杖は粉碎され、魔法媒体としての働きを失っていた。

(おまけに……)

チラリと周囲を見渡せば、一面黒の海。
どうやら少々時間をかけ過ぎたらしい。

「兄さん……」

ギョツと、ネギが不安げな表情でレギの服の裾を握る。
レギは無理やり笑みを作り、痛む右手でネギの頭を撫でてやる。

「安心しな。お前は絶対に守ってやる」

「うん……」

魔法は使えない、周りは敵の海。
もはや最悪を通りこして絶望的な状況。
だが諦めるわけにはいかないのだ。

『ウオオオオオオオオ!!』

怒号と共に、漆黒の軍団がレギ達を蹂躪せんと襲いかかる。
これからのことを思いネギは目を閉じたが、レギはそうしなかった。

魔法も使えない状況で、絶望的な状況で、目を逸らさず、琥珀の

瞳で迫りくる黒の軍団を睨みつけた

。（テメエは英雄なんだろ？）

こんな状況だと言うのに 否、こんな状況だからこそかもしれない。

無意識の内に、レギはアイツのことを思っていた。

（多くの人を救ったんだろ？）

なぜかはわからない。

本当にいつの間にか、アイツのことを思っていた。嫌っている筈のアイツを。

（世界を救ったんだろ？）

だったら、

「俺達も救いやがれ、親父！！」

叫びを最後にし、二人は漆黒の海へと飲み込まれる。その時だった。

「ああ。任せときな」

声が、聞こえたのは。

えつとレギが疑問の声を呈す間もなく、金色の稲光が視界を埋め尽くす。

目を焼かんばかりの光が世界を包みこみ、レギ達を覆わんとしていた黒を蹂躪した。

出来の悪いSF映画を見ている様な、安直すぎる展開。

呆けるレギとネギの前に、ふわりとアイツは降り立った。

全身をすっぽりと覆うボロボロのローブに、レギの身長ほどもある長い杖。

顔はフードに覆われてはっきりとは見えないが、先程僅かに見えた髪の色はレギやネギと同じ燃えるような赤。

「つつ！」

言いたいことは山ほどある。

何で生きているのか。

今まで何をやってきたのか。

けれど、口から出たのは違う言葉。

「来るのがおせえんだよ！ 親父！！！」

ナギ・スプリングフィールド、参戦。

第三話 『襲撃 起点』(後書き)

第三話、投稿。

第四話 『英雄』

「お父……さん？」

信じられないと言った風に、ネギは呟いた。だがその反応も無理はない。

なにせ、ネギは父親の顔を写真の中でしか知らないのだ。

顔も見えない、突然現れた人物が父親だと言われても、すぐにそれを受け入れることができよう筈もない。

そう。ネギの反応は正常。

おかしいのは、レギの方だった。

「……遅えんだよ、クソ親父」

レギとて、直接父親に会ったのはもう6年以上前。

それもたった数回だけのことだ。

にもかかわらず、レギには確信があった。

これは、ナギ・スプリングフィールドという不思議な確信が。

様々な感情が入り混じった二対の視線が突き刺さる中、ナギは僅かに二人の方へと振り返った。

「レギとネギか……大きくなったな。少し待ってる」

ぞくりと、大気が震えた。

膨大　　そう表現するのも馬鹿らしい、魔力の奔流が吹き荒れる。

魔性の者達さえも凍りつかせる、原初の息吹が世界を埋め尽くしていく。

「　　すぐに、終わらせる」

特別張り上げたわけでない、静かな声。

だと言うのに、その宣言は全ての者の耳に届いた。

『ウオオオオオオオ！！』

悪魔達は雄叫びを上げ、たった一人の人間の元へと殺到する。

そうしなければ、吞まれてしまうのだと彼らは本能的に感じ取っていた。

前方より襲いかかる黒き波。

レギとネギの身体が強張りを見せるなか、ナギは大きくその腕を薙ぎ払う。

嵐が、吹き荒れた。

民家に広がっていた大炎をも消し飛ばす強風が黒き波をさらい、その前線を後方へと押し戻す。

「……来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐」

レギのよく知る呪文が、ナギの口から力ある言葉として紡がれる。ただ、その詠唱速度は比べ物にならない。

優にレギの三倍、二秒とかがからずにこの世に顕現した雷と暴風がナギの右腕へと収束する。

「つつ！　何て魔力してやがる！？」

詠唱速度がレギの三倍なら、そこに込められた魔力は更にその三倍。

つまり、レギが『雷の暴風』を放つのに使用した十倍近い魔力をもって、ナギは『雷の暴風』を完成させた。

そして、その威力は

「雷の暴風！！」

レギのそれを、遙かに上回る！！

ガッ！！

轟音と共に、光が弾けた。

それだけしか、レギにはわからなかった。

文字通り刹那の間。

気付いた時、光ははるか遠くに聳え立つ山肌を貫いていた。

「
……」

呆然、啞然。

レギとネギの心情を表すには、そんな言葉がぴったりだった。

後に残ったのは、大地に深く刻まれた爪跡と三分の一にまでその数を減らした魔の軍勢。

ナギはそれらを一瞥し

消えた。

「なっ!？」

目を離れたわけじゃない。

ただ本当に、忽然と消えたのだ。

一体どこにと疑問を呈すよりも早く、答えは爆音となって現れた。

「つつ!？」

ほとんど反射的に顔をその音源へと向ける。

飛び込んできたのは、夕闇へと姿を変えつつある空に同化する無数の黒。

それが宙に舞った悪魔だと認識するよりも早く、地上より発射された幾重もの黄色い光の矢が漏らすことなく黒を貫いた。

ゆっくりと、レギは視線を下へとおろす。

そこにいたのは勿論、大英雄ナギ・スプリングフィールド。

彼は闘っていた。

いや、これを闘いと呼んでもいいのだろうか？

群と成して襲い掛かる悪魔はナギにただ一つの傷をつけることすらも出来ないまま、存在を消滅させていく。

闘いというには余りにも一方的で残虐的。

最早どちらが化け物さえわからない、人智を超越した暴力。

まだ幼いネギはそれに怯えを見せ、レギは
魅せられた。

(……これが、英雄)

拳を振るうたびに悪魔が宙を舞い、腕を薙ぎ払えば暴風が吹き飛ばす。

瞬動は入りは愚か抜きさえも認識できないほど速く鋭く、放たれ

る魔法は全て必殺。

今もまた、レギとは比べ物にならぬ魔力の込められた三十もの魔法の射手が高速を持って軍勢へと襲い掛かり、その数を削り取っていく。

正に理不尽なまでの強さ。

(これが、ナギ・スプリングフィールド！)

拳を握りしめるとともに、一際大きな光が前方で弾けた。

それがこの戦闘　　虐殺の終結だった。

光から戻った視界。

そこに黒き軍勢の姿はどこにもなく、残すはたった一匹の悪魔のみ。

だがその一匹すら、既に満身創痍だった。

光を反射しないのつぺりとした漆黒の体躯は至る所が傷つき、空を飛ぶための翼は肩口からもがれている。

ナギはそんな瀕死の悪魔の首元を右手で掴むと、そのまま片手一本で持ち上げた。

ぶらりと、宙に浮く悪魔の不気味な黄色い瞳が目の前の化け物を捉える。

めくれたフードの下から零れ落ちる、赤い髪を。

「…………ソウカ…貴様ガ…アノ…」

人語を解し、言葉を話す。

それは、この悪魔が単なる下級の雑兵とは異なるという証。

「クク…………コノカ…ドチラガ化ケ物カ…………ワカランナ…」

「……………」

無言のまま、ナギの右手に力がこもる。

ゴキリと、嫌な音が響き　　悪魔はその活動を停止させた。
高々と燃え盛る炎の音が嫌に大きくレギの耳に届く。
止まった世界。

それを動かしたのはナギだった。

今の今まで闘っていたその人物は動かなくなった悪魔を放り投げると、ゆっくりとレギたちの元へと歩み寄っていく。

炎の光を受けて露わとなったその素顔。

赤い髪に端正な顔立ちの容姿は、レギをそのまま成長させたのではないかと疑うほどによく似ていた。

ナギが二人の前で立ち止まる。

びくりと、背後でネギが身を震わせたのがレギにはわかった。

「……………わるい。来るのが……………遅すぎた」

悔いるように、嘆くようにナギは呟いた。

レギはそんな父の顔を見つめ、

「……………もっと早くテメエが来てたら村は無事だっただろうな」

「……………そう……だな」

「碌に顔も見せねえで。これまで俺た
だったのか、テメエはわかってんのか？」

ネギがどんな気持ち

「……………返す言葉もねえよ」

罵倒を受けるのはわかっていたのだろう。

ナギは静かに顔を伏せた。

沈黙の間。

「……けどまあ」

はつと、ナギは顔を上げた。

「テメエが来なけりや、俺とネギは助からなかった。……そのことは感謝してやる」

そっぽを向いて、そう呟くレギ。

よく見れば、その頬には薄らと髪色と同じ赤が灯っていた。

「捻くれてやがんな……誰に似たんだか」

「テメエしかいねえよ、バカ親父」

久方ぶり、いやもしかしたら初めてかもしれない親子のやり取り。ナギはそれまで固かった表情を崩し、乱雑にレギの赤毛をかき回した。

「つてえな！ 離せ！」

「照れるな照れるな。お父様からの愛情をしつかり受け取るときな」

「んな気持ち悪いもん、いるかよ！」

レギは何とかナギの手を払いのけようとするが、そこはさすが英雄。

子供の腕力程度ではびくともしない。

結局何もできないまま髪をかき回されてようやく解放される。

レギは文句の一つでも言ってるつと鼻息を荒げたが、それは出来なかった。

なぜなら、

「そうか。やっぱ、俺に似ちまったんだな……」

寂しげな、英雄の顔を見てしまったから。

怒りのやり場をなくして立ち尽くすレギ。

それを知ってか知らずか、ナギはすぐに表情を変えてレギの後ろに目をやった。

「お前がネギか？」

「う……うん」

おずおずと答えながらも、ネギの手はレギの服の裾を掴んでいる。

やはり未だ不安があるのだろう。

目の前の人物が待ち焦がれた父親だとわかってても、レギと違ってそれを実感できていない。

(それにさっきの恐怖もあるか……)

まだ三歳足らずという年齢を考えれば、あの戦闘言つ名の虐殺は相当堪えたはず。

どうという言葉をかけるべきかとレギが逡巡するより先に、ナギの手の平がネギの頭へのせられた。

「怖い思いをさせて悪かったな」

「っ……」

小さな体が一瞬強張り、ゆっくりと弛緩する。

「ほんとうに…おとう…さん？」

「おとう」

優しくナギが微笑む。

それを見た瞬間ネギの不安は取り除かれ、安堵の気持ちに涙となつて一気に溢れ出した。

「ううう…おとうさん…お父さあーん…！」

レギの時とは違い、大きな手が優しくネギの髪を撫でていく。

「…ずいぶん俺と対応が違うじゃねえか」

「なんだ？ やってほしいのか？」

「いるか！」

吠える兄に父が笑い、弟もまたそれを見て泣き顔の中に笑顔を浮かべる。

こんな時ではあったが、確かにそこには親子の姿があった。

家族として

だがそれは、ほんの僅かな時でしかなかった。

「……そろそろ行かねえとな」

ネギが泣き止んだ頃、ナギはそう言葉を漏らし折っていた膝を起こす。

えっとネギが疑問符を浮かべると同時、レギはナギへと詰め寄った。

「テメエ！ こんな時でもまだ俺らを放っておく気かよ!？」

「……すまねえ」

「すまねえじゃねえだろ！ 一体どんな理由があつて」

そこまで言つて、レギは気づいた。

ローブからのぞかせるナギの手が、段々と透けつつあることに。

「ちょっと、前に無茶やつちまつてな。あんまし時間がねえんだ」

「……何とかならねえのかよ」

「すまねえ」

「ちっ!」

やり場のない苛立ちがレギの口からこぼれる。すまねえと、三度ナギは同じ言葉を紡いだ。

「お父さん……行っちゃう…の？」

「ああ。悪いな」

また、父親と会えなくなる。

一度は止まった涙が、再びネギの目元に浮かんだ。

「男ならあんまし泣くんじゅねえぞ……って、ネギにはまだはええか」

困ったように、ナギは頬をかく。

そして何か思いついたのか、手に握った杖に目をやる。

「そうだな。お前たちにこの杖と

」

そこで、ナギは言葉を途ざらせた。

気付いたのだ。

その存在に。

いやナギだけではない。

レギもまた、強烈な寒気をその身に感じとっていた。

（これ……は…）

村に入るときに感じたものと同じ。

二人の視線が村の中央部へと走る。

荒れ果て、燃え盛る教会の前にそれはいた。

「やあ。感動的なシーンの途中で悪いね」

一言でいうなら、白。

色素が抜けた白髪に血のように赤い瞳。

いっそ病的とさえ思えるほど白い肌は、これまた染み一つない純白の衣服によって覆われている。

「イレギュラーが一人いるにもかかわらず、殆ど原作通り。やっぱり正史の力は大きいのかな？ 見ている分には中々興味深かったけど、流石にそろそろ飽きてきたよ」

何を言っているのかレギにはわからない。

だというのに、それは非常に重要なことのようにレギには思われた。

「じゃあ、そろそろ始めようか」

ニツと、その顔に獰猛な笑みが張り付いた。

「正史から外れた物語を」

第四話 『英雄』（後書き）

4話投稿。そろそろ原作との乖離が開始。
感想、批評待ってます。

第五話 『分岐』

「テメエ、一体何もんだ？」

固い声音と共にナギが一步前に出る。

それは二人の息子を守るために出た、半ば無意識での行動。英雄は感じ取っていた。

こいつは違つと。

対峙していた数千の軍勢よりもこの一の方が危険だと、その直感が告げていた。

「英雄にしては酷く陳腐な質問だね、ナギ・スプリングフィールド」

剣呑な視線を意に介した様子もなく、突如として現れた人物は笑みを浮かべたままゆつくりと3人の方へ歩を進めていく。

整った、整いすぎた容姿。

声質から男だと判断できたが、わかつたのはそれだけ。

余りにも美しすぎる容貌が年齢を不詳にし、特徴的な肌色であるにもかかわらず西洋系か東洋系かの区別すらつけさせない。

年齢や性別、人種すらも超越した魔性の美しさがそこにはあった。

「僕が何者か……そんなこと決まっているじゃないか」

歩みが止まり、真紅の瞳がナギを捉えた。

「村人を襲う雑魚がいた。雑魚を倒すヒーローが現れた。だったらその次に現れるのは」

楽しそうに、愉快そうに、厳かに、悲しそうに、静かに、男は言った。

「ボスキャラだよ」

同時、ナギが動いた。

瞬動を用いた超高速移動術によって文字通り目にも止まらぬ速度で男に肉薄し、その勢いのまま大砲の如き拳を振りぬく。

「おらっ！」

「おやおや。ずいぶんと気が早いね」

ひらりと、拳圧によって生じた風を受けながら男は軽やかなステップと共に後退する。

「僕としてはもう少しゆっくりしてもいいんだけど」

「俺にその気はねえ……よっ！」

“魔法の射手・収束・光の十三矢”

腰だめの構えより放たれた巨大な光の帯が、大地を抉り取りながら突き進む。

その威力は先の戦いで実証済み。
十メートルと離れていないこの距離ならば、着弾までコンマ一秒とかかるまい。

だというのに、男は動かなかった。

向かってくる光に対し、ただ軽く右手を突き出す。
それだけ。

それだけで、光線は欠片も残さず掻き消えた。

「つつ!？」

「ふむ」

何かを確認するように、男は攻撃を受け止めた手の平を見た。
純白の中に僅かに浮かぶ、赤い血を。

「今の状態だとこれぐらいが限界か」

「……何をしやがった？」

障壁を張ったわけでも、魔法や気で相殺したわけでもない。
本当にただ、手を突き出しただけ。
だが事実として魔法は打ち破られている。

「さあ。教えないよ」

「ちっ!」

今度はナギの周囲に無数の槍が出現。
《雷の投擲》の名を持つ帯電した長槍はその切っ先を敵へと向け、
音速にも及ぼうかという速度を持って一斉に射出される。

「……流石に全部は消しきれないな」

ぼつりと、男が咳くとその背後に数えきれない魔法陣が虚空の中

に浮かびあがった。

肌の色とは逆、黒を基調とした現代の魔法系統にはない不可思議な魔法陣。

それらの中央部が鈍く光り、同時、陣と同じ数の黒き閃光が迫りくる雷の槍を漏らすことなく叩き墮とす。

よく知る、だが有り得るはずのない光景にナギは大きく目を見開いた。

「その魔法　まさか、テメエは!？」

「違うよ」

荒げた声を、平坦な声が遮った。

「僕は君が想像している人物でもなければその眷属でもない。もっとも、深い関係にあることに違いはないんだけどね」

「　　どつという意味だ？」

「さてね。しかし手を休めていていいのかな？　余り時間がないんだろ？」

「ちつ。聞いてやがったのか」

「いやいや。単に“知っていた”だけだよ」

「わけのわからねえことを！」

制限時間がある以上、先のような平行線では分が悪い。

相手の攻撃線上にレギ達が入らないよう留意しつつ、ナギは弾幕

と共に相手の懐へと飛び込んだ。

「らっ！」

「そう。僕は知っている。十三年前、君が“あれ”を倒したことも、大罪人となった女王を救出したことも。京都でスクナを封印したことも……」

戦闘が始まって、男は言葉を紡ぐのを止めない。

雷と光の魔法の射手を漆黒の魔法障壁で受け止め、ナギが接近するよりも早く後方へと距離を取った。

「『闇の福音』に君が呪いをかけたことも。君が二番目と相打ちになったことも。『完全なる世界』が血眼になって探している『黄昏の姫巫女』がどこにいるのかさえ……」

「……」

「どうして知っているのかって顔だね？」

くすりと、男は笑う。

余りにも美しい、魔の微笑。

「言ったじゃないか。僕は知っていると」

「けっ。ストーカーかテメエは。一体何のためにここに来やがった？」

「それほど大した理由じゃないさ。一つは単純な興味。もう一つは」

「

真紅の瞳はナギを捉えてはいなかった。
捉えているのはその向こう。
身を寄せ合っている二人の子供。

「僕の前に立ち塞がる救世主を見定めたくてね」

「ゴウッ!」

「……レギとネギに何する気だ？」

「はは。すごい魔力と殺気だ。そんなにも二人が心配かい？ これまで放っておいたくせに。今更父親づらをするのかな？」

「テメエに言われなくても、俺が父親って言える義理じゃねえのはわかってんだよ。でもな、それでも子供を守るのが親つてもんだろうが!」

咆哮と共にナギが跳ぶ。

その左手に込められしは最大密度までに高められた光の矢。

「親の愛情か……なるほど。わからないわけじゃない」

「おらあ!」

「でも」

「なっ!」

ナギの表情が驚愕に染まる。
打ち出した拳。

最大の魔力と精霊を込めて打ち出したそれが、止められていた。
障壁も、魔力も込められていない男の右手によって。

「黙っていてもらうよ」

「魔法が……消えるっ!?!」

拳に込められていた魔法の射手は愚か、全身を包んでいた膨大な魔力が突如として消滅する。

余りにも予想外な光景に一瞬動きを止めたナギの体を、漆黒の魔法陣が捕えた。

「っっ!」

「不完全とはいえ無効化して尚もこの威力……なるほど。流石はかつて世界に選ばれた英雄だ」

男は血に濡れた右手を一瞥し、目線を上げる。

空中に張り付けられた英雄。

半ば透けつつあるその身体が残された時間を物語っていた。

「ただ君の物語は既に完結し、その役目は別の人物に移っている。
世界の加護が失われた以上、人間　　それも魔法使いが僕に勝つことは不可能だよ」

「テ……メエ!!」

「さようなら。かつての英雄。僕の敵に選ばれたのは君じゃないんだ」

そつと、男は右手でナギの体に触れた。

そして、ナギ・スプリングフィールドはこの世から姿を消した。

第五話 『分岐』 (後書き)

少し短いけどきりがいいので投稿。

感想、評価待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5548s/>

紅蓮の翼

2011年5月6日01時42分発行